

と く
徳

ほ う
朋

現実を歩む勇気をいただく

いちらく まこと
一楽 真



いちらく まこと

1957-現在

石川県小松市出身。大谷大学学長。真宗大谷派宗円寺住職。

親鸞聖人はご自身を「愚禿」と名のっておられます。「愚」ということは、「自分は今まで賢いと思っていたけれども、何も見えていなかった」ということがはっきりしたということです。その「愚」という字を名前のいちばん上に付けたのは、そのことを忘れてはいけないという覚悟なのでしょう。だからこそ教えを聞き続けなければならない。これが私たちの宗祖である親鸞聖人ではないでしょうか。

私たちはややもすると、暫く聞法しただけで、「だいたい仏法はわかってきた」と言って、賢くなった気になってしまうのです。それは親鸞聖人の生き方とはまったく違います。

親鸞聖人は自分は愚かだということに本当にうなずかれました。しかし、愚かだからだめなのではないのです。愚かだからこそ、教えを聞き続けていきましょうと言われるのです。教えに依って、現実を一步一步歩んでいこう、これが「濁世の目足」というときの「足」であります。現代風に言えば、勇気と言っていいと思います。現実を歩む勇気をいただくのです。

なぜかと言うと、世の中に生きてるとさまざまな物差し、価値観が押し寄せてきます。例えば病気になった人にはものすごく冷たい。あるいは歳を取って働けなくなったりすると、ものすごく冷たい。そんな世の中ですね。「働けないものがいつまで生きているんだ」と言わん

ばかりの雰囲気です。そうすると、お年寄りはだんだん「自分はいきておったらいかんのかな」という気持ちにさせられてくるのです。それに対して「そうではない。世の中の物差しの方が実は歪ゆがんでおるのだ」と教えてくださるのが仏法です。一人ひとり、誰とも代かわれないのちを最後の最後まで生ききっていく事が何よりも大事なのです。そのことを仏さまは照らし出してくださるし、その教えに触れるからこそ現実を一步一步歩む勇気をいただくのです。

ですから繰り返しますが、浄土の教えはあの世の話ではありません。あの世に行ってからのことではなく、この世を生ききっていくための教えなのです。この世が濁にごっているからこそ教えがいるのです。大事なものが見えにくいからこそ、この教えが必要なのです。



(『この世を生きる念仏の教え』)

現実を生きていると様々な価値観やモノサシによって身動きがとれなくなることはないでしょうか。それは世間の物差しによって自分で自分を縛っているということです。そんなとき「そうではない。世の中のモノサシの方が歪ゆがんでいるんだ」と何が真実なのかを教えて下さるのが仏法です。謙虚けんきよに聞き続ける事が大切です。(哲弘 拝)



この「徳朋とくほう」は仏教を拠より所としている方々の言葉ことばに直じかに触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。